当時のイスラム教徒の役割，共産党組織の内実，西ジャワやスマトラ西岸部の当時の社会・政治情勢など，幾つかの重要な問題への解答も含んでいる貴重な文書である。（口羽益生）

Goethals, Peter R.: Aspects of Local Government in a Sumbawan Village (Eastern Indonesia). (Monograph Series, Modern Indonesia Project). Southeast Asia Program, Cornell University, Ithaca. 1961. *pp. vii + 143*

コーネル大学の Modern Indonesia Project 並びに Sontheast Asia Program の director であり，又近代インドネシア政治史研究の指導的地位にある G. McT. Kahin 教授は，かつて，現代インドネシア研究において，最も未開拓な分野の一つは，地方の社会，政治経済情勢の研究であると述べたことがある。本書は，コーネル大学 Modern Indonesia Project の monograph series の内で，地方の社会政治情勢を取扱った最初の報告である。

社会人類学者である著者 Goethals は，1954年より二年間，Sumbawa 島北端の農村 Rarak を中心に，集約的な現地調査を行ったが，本書は，その調査報告の一部であり，題名が示すように，分析の焦点は，社会政治情勢に置かれている。

インドネシアの歴史を振り返って見れば，容易に理解されることであるが，イスラムの浸透した地域では，オランダ植民地政府の分割統治や間接統治の政策とも絡んで，伝統的な adat（慣習）首長とイスラムの指導者 kijaji (ulama) の勢力間の力関係が絶えず問題にされている。17世紀にイスラムが到来した Sumbawa でも同様である。Goethals は，Rarak の adat 勢力と hukum（イスラム法）勢力間の力関係の社会的基盤の分析を試みている。

村落レベルの adat 勢力は，旧制村長 (kepala kampong) によって代表されるが，この村長の役割が地方自治体の公式的なものに限られ，漠然としたものであるため，彼の村民に対する直接的影響力は弱い。1951年の村落合併による村連合 (gabungan) の確立は，村長の地位を更に不安定なものにしている。kepala kampong の役職名も wakil kepala gabungan（助役）に変っている。

hukum 勢力の代表者は，村の mosque の責任者である lebé であるが，lebé は，ジャワの penghulu に当る。lebé を長とする mosque 役員 (isi mesigét) には，その他に，rura, pengulu, mudom, ketib, marbat 等が居る。彼らは，婚姻，相続，死亡に関する手続きの指導監督，mosque での礼拝，その他の儀礼を通じて，村民と密接な連がりを持っている。注目されることは，彼らは又，呪医の (sanro) 役割をも演じていることである。1955年の総選挙では，政治的に，インドネシアは，主に四つの政党（国民党，Masjumi 党，NU党，共産党）に色分けされたのであるが，Rarak においては，hukum 勢力が Masjumi 党を支持して圧倒的に強い。adat 勢力は，イスラム保守のNU党を，一部青年層は，国民党を支持している。Masjumi 党は，本来，知的，進歩的なイスラム革新派の政党と特色づけられているが，Goethals は，それが，Rarak においては，文盲率の最も高いイスラム保守派によって支持され，インドネシア地方政治の社会的基盤は必ずしも全国レベルと合致しない点を明確に指摘している。（口羽益生）

Geertz, Hildred: The Javanese Family, A Study of Kinship and Socialization. The Free Press of Glencoe, N.Y. 1961. *pp. xii + 172*

本書は，MIT 国際研究センターにおける Java project (1951-53) の成果の一部である。同プロジェクトでは，七人の社会学者並びに人類学者が，夫々，村落，市場，政治・階級構造，家族，華僑社会，言語のテーマを担当し，東ジャワ，スラバヤの南方，ブランタス河流域の人口約1万8千人の Modjokuto という仮名の町を中心に二年間の現地調査を行っている。この調査成果は，既に，調査員の学位論文として報告済みであるが，書物として最初に出版されたのは，前号の図書紹介欄にて紹介した C. Geertz の「ジャワの宗教」であり，Geertz 夫人の本書が，二番目のものである。同夫人は，ハーバード大学，カ州大学，MIT などで，研究員又は instructor として活躍しておられたが，目下，主婦として「家庭づくり」に専念しておられるようだ。

副題が示すように，本書では，ジャワ人が，mature

"Djawah" として形成される過程に，分析の中心が置かれている。「家族は個人と彼が所属する文化のかけ橋である」というモチーフは，本書全体の底流となっている。

H. Geertz に依れば，親族を通じて見たジャワ社会の価値体系には，二つの焦点がある。第一は，「敬」(urmat 又は adji) の概念であり，それは，更に三つの意味に分化する。(1)畏 (wedi)．(2)恥 (isin)，(3)慎み (sungkan) の三つである。第二は，社会的調和 (rukun) の概念であるが，ここで重要なことは，たとえ見せかけであっても，調和を保つように努める態度である。この二つは，ジャワ社会のあらゆる局面において，望ましい行為基準とされるもので，価値レベルにおけるジャワ社会の背景である。mature Djawah とは，これらの価値が内面化された人格を意味する。

このような人格は，ジャワ家族内において，どのように形成されるのか。この問を，Geertz は，あらゆる角度から分析する。親族の形態，機能の分析も，常に，この問と関連づけられている。

ジャワ家族の形態的特徴は，双系的核家族にあるが（村落では，65%），同時に妻方に重点が置かれる matri-focal pattern の傾向が強い。特定の親族集団の型はなく，ego. を中心とする近住の親族が，生活の折目折目で共同する。このような分析の内で注目に価するものは，matri-focal pattern の傾向とジャワ社会構造の連関，又，婚姻，相続の慣習に関連するイスラム法の浸透度合の分析であろう。意外にイスラム法が軽視されている点が指摘されている。極度に高い離婚率の要因分析も興味深い。いずれも重要な問題であるが，ともすれば，現地資料の不備のために捕え所がなく，又長期の観察を要する上記諸問題に取り組んで，一応の成果を挙げた Geertz 夫人の努力に対し，筆者は，深く敬意を表する。（口羽益生）

Ooi Jin-Bee : Land, People and Economy in Malaya. Longmans, London. 1963. *pp. xx+426*

本書は人文地理学者の手によるマラヤ地理の概説書である。もともと東南アジアの諸国のなかで，しっかりした地理学教室をもつ大学はシンガポール大学とマラヤ大学であり，また地理学的研究の最も進んでいるのはマラヤである。しかし，これまで，まとまったマラヤ地理としては，Ginsburg, Roberts 教授共著の Malaya があったが，ここにイギリスの S.H. Beaver 教授監修の権威ある Geographies for Advanced Study の1冊として，きわめて詳細なマラヤ地誌が出版されたことは，地理学研究からだけでなく，東南アジア研究の立場から慶賀すべきことであろう。

著者 Ooi Jin-Bee 博士は中国系で，マラヤ生まれ，当時シンガポールにあったマラヤ大学をおえて，オックスフォード大学で研究し，現在シンガポール大学の地理学の Senior Lecturer である。このことは，東南アジアの地理も，いよいよ，外国人学者でなくて，現地人の学者でもって書かれるようになったことを示している。地理学研究上の注目すべき発展であろう。

マラヤ地理として，本書は3部からなる。第1部は「土地」であり，地質と地形・気候・植生・土壌をとりあつかう。第2部は「住民」であり，人口パターンの形成・人口分布のパターン・集落のパターンをとりあげる。第3部は「経済」であって，未開人の原始経済・農業経済・家畜飼養漁業林業・鉱業・工業・商業・運輸・問題と展望とにわけられている。

その本の題目どおり，land, people および economy にわたっての comprehensive な研究である。しかも，68図におよぶ地図と図表は，さすがに地理学者だけあって，きれいであり，また要領を得ている。48葉におよぶ写真，また64をかぞえる統計は，本文の理解を助けている。わたくしの知るかぎり，くりかえしていうが，はじめてのマラヤ地理である。マラヤ研究のためには，ぜひとも目をとおさなければならないものである。

ただ，叙述の方法はあくまで従来の伝統的な地理学のそれによっている。いいかえると，きわめて常識的な見方が多い。というより，常識的な理解から一歩も離れていないという感じが強い。それだけに，なんでも書いてあるが，ともすれば重点的な考察がなく，無味乾燥な叙述が多い。しかも，教科書であることも目的とされたので，余分な叙述が見られる。たとえば，土壌とはなんかといった定義などあるのは，余分なことのように思われる。その反面，政治過程や経済成長についての分析がほとんどない。あるいはまた人文地理学的に見たマラヤの特質をとらえようともされていない。あまりにも，伝統的地理学だといわざるを得な